
Celestial Memories

想いの交差する空で

a16tenpu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Celestial Memories
で 想いの交差する空

【Nコード】

N7659W

【作者名】

a16tenpu

【あらすじ】

大乱を挟んで勢力図の塗り替えられた極東アジア。その空は謀略と憎しみに満ちていた。だが、空に漂うのは暗い世界だけではない。純粹な希望が、想いが、真摯な願いと共に託されていた。その大空をかつて仲間と交わした約束を果たす為だけに飛び続けている青年は、戦争という大きなうねりの中で新しい風に出会う。彼は全てを傷つける歪んだ空の果てに何を見つけるのか……。

とある管制官の回想（前書き）

プロローグって難しいものですね。引き込めないといけないのに全く盛り上がりそうに思えません。最低限のキーワードをバラマいたので勘弁してください。これらが何を意味しているかはそのうち明らかになるでしょう……多分。

とある管制官の回想

西暦2019年11月4日

日本国 愛媛県松山市 松山海軍航空基地

よくもまあ、上層部に睨まれた私に取材を申し込めたものだ

私はどうでも良い感想を抱きながら、目の前の人物の挨拶を聞き流していた。報道屋の本題以外の会話など面白いものではない。さらに言えば事前の電話打ち合わせで用件は解っている。全く聞かなくても問題ないところだ。

それに気付いてか、インタビュアーが挨拶を切り上げ、インタビュアー始めようとする。

「申し訳ない。多少聞きたいことがあるのだが……」

慌ててそれを遮った私は、些細ながら胸中に引っかかっていた疑問を投げかけた。

「何故、彼と関わりのある他の人ではなく、私に？」

”彼”と関わりのある人物は決して少ないわけではない。公私共々のパートナーだった人も生存している。彼についての話を聞くだけならもつと相応しい人はいるのだ。だが、疑問に深い理由がなかったが故かその疑問に対するインタビュアーの答えも簡潔だった。

貴方が最も彼を知っている筈でしょうから

それは確かに真実だった。私は管制官だったから戦場での彼の事をよく理解している。二度目の戦争では早期警戒空中管制機（AW

ACS)の管制指揮官として、彼の戦歴のほぼ全てを見ていたのだから当然だ。

「確かにその通りだ。私は彼と最も長く飛んだ」

だが、私に出来たのはそれだけだった。

「私に出来ることは見届けることだけだったからだ」

だから、彼が何を抱えていたのか、それを本当に知っているのは私ではなかった。

「本当に彼について知りたいなら私以外に聞くべきだとは思うが、本当に構わないか？」

ええ、問題はありません

静かに頷く。当然か、スケジュールの都合を付ける時点でその辺の事情は説明してある。

「……そうだな」

頷きながら手元のタブレット端末に触れ、目的の記録を漁る。膨大なデータが格納されたその端末には、彼との交信記録がほぼ完全な形で残されていた。その英雄の記録の一端を覗きながら、まだ過去と言うには近すぎる空の記憶を思い起こす。

「まずは、彼が英雄になった切っ掛けから話すとでもしようか」

……彼がただのエースから英雄になった　私が個人に呪われた称号を付け、歴史の渦に放り込んだ　日の事を。

西暦2017年3月12日

アメリカ合衆国　マリアナ諸島沖　空域呼称A9C

近代と呼ばれる時代に入ってから、戦争とは速度と補給と情報分析で構成されるようになった。戦略という未来図からそれらが欠けた国家の戦争は滅びを招き、戦術が戦略をひっくり返す事は起こり得ない。その摂理の元に全ての戦争が推移し、歴史が形作られてきた。

『From Gale Leader to all unit, are you ready? (ゲール・リーダーより全機へ、準備は出来てるか?)』

だが、私が見届けていたものはそれらの常識とは程遠い”何か”だった。私が指揮するE-767J早期警戒空中管制機のコンソールには、たった12の光点だけが表示されていた。友軍機が4、敵機を意味するIFF不明の機体が8。

目的地の周辺空域で発生している大規模消耗戦と化した空戦の中、双方の意表を突いて作戦目標を完遂しつつある一部隊だけが、目的地たる遠すぎた島に辿り着いていたのだ。

『Of course, sir (勿論です、隊長)』
自信に満ちたその部隊のパイロット達の通信がヘッドセットから流れる。その弾んだ言葉を聞いて頭に疑問が過ぎった。

どうしてそれほど余裕で居られるのか

と。

確かに彼らが一番乗りを果たしていたのは間違いなかった。状況に十分に対処出来る戦力も能力も 編隊長だけは確かに 持っている。だが、彼らがいる空域は敵勢力圏の中心だったのだ。

『Aegis eye to Gale flight, 8 enemy aircraft come from vector

120・50mile（イージスアイよりゲール隊へ、方位120より敵編隊8機接近。50マイル）」

私は注意喚起のために警告を送った。とっくに彼らが気づいている事実を種にして。

『This is gale reader, I has already caught.（こちらゲールリーダー、既に捕捉している）……間違いはない。」彼ら」だ』

リーダーは即座に返答を入れた。……解っている、と。絶望的な状況を本当に理解しているのか、その時の私には判断できなかった。Retreat temporarily. It reorganizes by reinforcement injection（一時後退してくれ。増援の投入で再編成をする）」彼が素晴らしい腕を持っているのはよく知っていた。だがそれは一介のパイロットとしての話であって、最強を保証できる無敵の存在ではなかった。

『撤退？ 冗談が上手いな』

それを承知していたはずの彼が出したのは”軽口”だった。

『此処で下がっても、もう出れる部隊が無いだろう？』

「だが……」

第一、率いている3機は、敗残兵の寄せ集めでしかなかった。

彼ら”相手では盾になるかだって疑わしいほどの。

『どのみち、もう逃げられる距離じゃない』

だが、彼は軽く笑い飛ばして見せた。私のその不安が杞憂であると言わんばかりに。

『誰も死なせやしないし、墜ちもしないさ。安心しろ』

「……安心しろ、か」

思わず私は眩きを漏らしていた。

確かに、彼はいつもそうであった。例え周囲が諦めるほど厳しい状況にも平然と飛び込んで、何事も無かったかのように帰投の宣言を出す。

だが、その時の私にはその当たり前が信じられなかった。

何故、彼はいつも笑っていられる？ 目の前に待ちかまえているはずの死を恐れずにいられるとでも言うのか？

長い間見てきたからこそ、胸中の疑問は大きくなっていた。

「……本当に信じられると思うのか？」

『その結果を見て来たはずだ。今更言う台詞じゃない』

彼は私の感じた不安など笑い飛ばせる程度のものだと思っていたのだらう。それまでがそうだったから。

『それに、俺は”エース”だ。だからこそ、この場所に辿り着いた』
確かに、敵軍の中で対応できたのは最終予備として後方空域に待機していた敵軍の最精鋭部隊のみだった。目標地点の敵地上部隊は最初に行われた友軍艦隊の超長距離砲撃で沈黙していて、それぞれの主力は互いに拘束されたままだった。

彼らだけが敵も味方も関係なく、誰も手を出せない場所にいたのだ

だが、それは一瞬の幻想に過ぎない。彼だって解っているはずだった。

「エースだからどうにかなるものじゃない！」

既に先陣を切った友軍航空隊は撤退を始めていたのだ。弾薬と燃料の欠乏が原因で、無理に戦場に留まらせるわけには行かない。そもそもその戦力差を考えればどうしようもなかったのだ。

敵もほぼ壊滅していたし、ほぼ弾薬も残されては居ないはずだ。

とは言え、そこは彼らのホームグラウンド。残存部隊から4機程度の援軍を捻り出す位の余力は残っていたし、彼らは特攻したところで脱出さえできれば降りる場所があった。こちらではそうはいかないが。

「今すぐ撤退しろ！ これは命令だ！」

彼らの努力をフイにしてしまったのは残念だったが、もう撤退させるしかなかった。私や後方で管制している指揮官達が増援の投入タイミングを誤った時点で、手段は残されていなかったのだから。

「それは従えない。後に機会は無いからな」

だが、彼はそれを受け入れなかった。既に死んだパイロット達の行動を無駄にしたいくなかったのか、それとも……、答えを此処で示すためか。

「命令だと聞こえなかったのか！ 撤退しろ！」

軍隊の立場の違いを強調してもう一度繰り返す。それに対する拒絶は非常に簡潔だった。

「Gale Leader, Engage」

彼がただ一言を告げ、彼らは私の指揮下から離れてみせたのだ。元々それは作戦とは関係なく予め決められていた交戦規定^{ルール}だった。だが、この瞬間にそれを適用して戦うことを宣言するとは思っていなかった。

そこまでして決着を着ける必要があるというのか？

「全てを始めた人間の責任だからな」

その言葉が私の呟きへの返答だったことに気付いたのは、数瞬間の時を挟んだ後だった。

「彼”も同じなんだろう」

彼が言った言葉にどれだけの覚悟があるかは分からない。彼が空

に拘る理由の始まりを知っていても、その感覚を共有することさえできない。

『だから、この空にいるんだ』

「……これで勝てたら英雄だぞ」

その言葉に対して言ったのがそれだった。言い終わるとほぼ同時に無責任な放言でしかないことに気付く。

『英雄か、悪くは無い呼び方だな』

それに気付かなかったのか、彼は小さく笑ってから、大見得を切って言つてのけた。

それなら、英雄になつてみせるまでさ

と。

とある管制官の回想（後書き）

次回更新は年明けだと思います。当然の事ながら遅筆なので送れることを前提にしてください。

諸注意（はじめにお読み下さい）（前書き）

念のため書いておいた注意書きです。長いので読み飛ばして結構ですが、最低限以下の箇条書き項目だけはお読み下さい。

- 1 ・駄文かつ遅筆につき更新が不定期です
- 2 ・頻繁に訂正が起こります。またストーリー展開の変更も起こります
- 3 ・更新履歴を定期的にチェックして下さい
- 4 ・この作品は特定の団体を賛美、支持するものではありません
- 5 ・感想、批評はお待ちしていますが、荒らし行為はお断りします

諸注意（はじめにお読み下さい）

以下は詳細の説明です。無駄に長いので読み飛ばしても結構です。

1 .
筆者は初投稿につき、現状では執筆スピードが遅く、文章能力も不安定であり、スランプや既に投稿した部分の修正で更新が遅くなる場合があります。それ故、更新は完全に不定期です。

2 .
1 .と同じ理由により、最新話と既に投稿した部分で、設定及び展開、人物の性格、行動原理などに矛盾が生じる可能性があります。確認した時点で加筆修正を行うので、随時改訂が行われます。

もし読んでいて矛盾を発見した場合は、感想欄もしくは作者へのメッセージでその問題を指摘して下さい。こちらで確認後、同じように随時説明及び修正を行います。

3 .
そのため加筆改訂が大幅に存在し、前後の繋がりが一時的に断絶する事があります。また、製作途中で大幅に展開が訂正される事も起こり得ます。ご了承下さい。

4 .
最新話の投稿日時及び、作品の根幹となる部分の変更を行った改訂の記録を第二部分の更新履歴に揭示致します。執筆過程で確認してきた問題事項、及び実行した修正などは即座に更新履歴に報告し、揭示する事と致します。各自で定期的に確認して下さい。

また、既に投稿した部分の大幅な改訂、重大な変更事項については、その時点の最新話の前書きにも併記する予定です。

4 .
この作品はフィクションです。本文中及び設定に実際の組織、国家、企業などの団体や、兵器、商品など実在する存在が登場します

が、これらの全ては現実とは全く関係なく、また、この作品が特定の団体を支持するものでないことを明記しておきます。

また、作者の政治思想が反映される場合がありますが、一切の政治思想の賛美は行っておりません。

5 .

読後の感想、問題点の指摘、起こるべき展開の予想など作品に関する記述は感想として自由に投稿して下さい。ただし、政治思想などの個人的判断、または理由なく行う批判（特に作品を削除すべきだというもの）は書き込みをお断りします。原則的には感想に返答しないだけで削除などは行いませんが、あまりに連続した投稿、他の読者が気分を害する物、個人への誹謗中傷のみのものについては予告なく削除する場合があります。ご了承ください。

以上の注意事項は適宜変更及び追加が行われることがあります。

基本的事項だけだとは思いますが、問題点がある場合は感想欄にてご指摘下さい。次話は更新履歴欄となり、その次から本編となります。

諸注意（はじめにお読み下さい）（後書き）

この小説が少しでも読者を楽しませられるものであることを祈っています。

更新履歴及びお知らせ（前書き）

更新記録が比較的溜まったので項目を独立させました。本編ではありませんのであしからず。

2012年1月3日

全面改稿につき既存投稿部分の削除を予定しています。詳細は本文で

更新履歴及びお知らせ

プロットの再構成を行った結果、現在投稿している3話（プロローグ及び第1話の2頁分）のうち、第1話の削除を行うことを決断致しました。Episode 1・1の全面改訂版を執筆中ですので、完成し次第入れ替える形で現在投稿している文は削除する予定です。次話を心待ちにいらっしゃる読者の方（あまり居そうには思えないが）の方々に御迷惑をお掛けすること深くお詫び申し上げますと共に、一刻も早く全面改訂版の投稿を行いたいと思います。

2011年9月16日

注意書き投稿

2011年9月17日

更新履歴部分を注意書きに追加。及び、Episode 1・1投稿

2011年10月3日

Episode 1・1改稿

2011年10月25日

Episode 1・2投稿

2011年11月8日

一部改稿

2011年12月24日

一部修正、及びプロローグ部分”とある管制官の回想”投稿

2012年1月3日

更新履歴ページ独立。既存部分削除のお知らせを追加

Episode 1・1 Eagle of Warfare (1) (前書き)

全面的に書きなおしてアクションシーンからにしました。所属部隊は教導隊から変えましたが、詳細は伏せてあります。

時間が足りないため英語部分がほとんど適用されていません。近以内に誤字訂正目的の改稿を行いますのでご了承下さい。

Episode 1.1 Eagle of Warfare (1)

それは梅雨時にはよく晴れた、雲一つ無い快晴の日に届いた。差出人不明のシンプルな便箋。こちらの住所と氏名を書いた欄はダイレクトメールみたいに印刷されたシールが張つてある。

当然心当たりはないし、最近は友人とは電子メールで連絡をとっている。最近は多くなった内向きな人間の一人である俺には、こんな風流なやり方で連絡を取ろうとする人間は居ないはずだ。しかも、風流と言いつてもいい加減すぎる。

だからこれは開ける前に捨てても構わないものだった。それでも俺がそれを開こうと思ったのはその表面にエアメールの標記が押されていたからだろう。

しかし、その便箋に入れられていたのはたった二枚の紙片だけだった。一枚目は流暢な筆記体で書かれた一文の載っていたメモ用紙。手紙にして送るような仰々しいものではない。しかし、その文面を読んだ瞬間に俺は送り主とこれの目的を理解した。

” What are you fighting for? ”

貴方は何のために戦う？

そこに記されていたのは俺の人生の半分を形作っている言葉。これを送ってきたのは、最も激しい時代を共に駆け抜けた最高の相棒にして、決して赦すことの出来ない宿敵。書かれていたのは……かつて俺が投げかけた疑問。これは彼が送ってきた答えなのだろう。

疑問文をそのまま投げ返す。つまり彼はこの質問に答えるつもり

はないと言つこと。

「……言葉は不要……か。つくづく彼らしいな」

もつと判りやすい内容にすることなど幾らでも出来ただろうに。本来なら文句の一言一言でも送り返すべきなのだろうが、肝心の文句が浮かんでこない。寡黙な彼にあまりに相応しい内容に思えたからだろう。

もう一枚は離陸寸前の戦闘機 最強と名高いF-22A の写真だった。彼はどうやら無事に古巣に帰っていたらしい。

「……そろそろ、悩んでる時間は終わるか」

そして、彼がどうしてこの言葉を返してきたのかもよく判っている。俺が彼とこうした平和な言葉を交わすことは二度とないからだ。彼に次に会うときは、最初に出会った場所と同じになる。そしてどちらかがそこでもう片方にピリオドを打つことになるだろう。

「俺も、覚悟を決めないとな」

あの空を共に飛んだ射手達の最後の生き残りとして、彼には負けるわけにはいかないのだから。

「負けるわけにはいかないんだ、…… 中佐」

風が吹き抜けて、メモ用紙が吹き飛ぶ。今日も翔ぶには丁度良い日だろう。一気に視界から消えていくメモ用紙を眺めながら、手元に残った写真をポケットに仕舞った。

Celestial Memories Episode 1 : Eagle of Warfare (1)

『 (ミッドナイト・アイよりエクセル、無線封止解除。交戦を許可する) 』

A W A C S の通信と共に白い視界が開けた。目の前には”敵機”であるM i G - 2 1 の4機編隊がダイヤモンドフォーメーション)

菱形陣形）を組んで柔らかい腹を晒している。

『（エクセル11交戦。12は後方援護！）』

「（了解、エクセル12交戦）」

編隊長機が交戦を宣言。僚機である俺は指示通りに先行するエクセル11の後背について追従する。

『（エクセル11、フォックス2！）』

エクセル11は早々にミサイルを発射、敵編隊を削りに掛かる。気付かれることを計算に入れての実に悪辣な一撃。相手がミサイルに気付いた上で散開すれば分散を指示して各個撃破するつもりだろう。第一、搭載されているAAM-5（○四式空対空誘導弾）は完全に背後を取った状態かつごく短距離から撃たれて、気軽に回避できる程追尾性能が低いわけではない。

『（敵編隊散開、此処から逃がすな）』

AWACSの警告通り、敵編隊が慌てて散開する。特にAAM-5の目標となったMiG-21は急降下で回避を図っていた……が、もう遅い。AAM-5はたちまち音速を突破してMiG-21に突き刺さる。無敵の盾など持ち合わせていない旧東側諸国の傑作戦闘機は、一瞬で木っ端微塵になった。

『（撃墜1）』

そう告げている間にも編隊長は次の敵機に機関砲を放っている。

撃墜スコアを4つ稼ぐまでの時間は極僅かだろう。MiG-21は第2世代戦闘機の雄ではあっても、西側における第4世代最強の戦闘機に叶うものではない。

「（エクセル12、ガンアタック）」

編隊長機が一先ず無視して放置した1機に機関砲弾を叩きこむ。

主翼の付け根に連続して命中した20mm砲弾がその華奢な胴体から翼を永遠に奪い去った。

『（エクセル11、スプラッシュ）』

交戦の宣言から敵編隊の全滅まで僅か40秒。標的射撃をしていると言ったほうがいい程の気楽さ。だが……、俺達にとって本番は

ここからだつた。

「……脆すぎる」

先程まで此処で飛んでいた旧式機の編隊は余りにも鈍かった。俺が訓練部隊にいた頃と比較しても劣るくらいには。

「……何処だ？ 何処にいる？」

編隊長も警戒感を露わに本来の作戦目標を探し続けていた。その声には作戦前以上の焦りが含まれている。当然の話だ。

「AWACS、状況は？」

本格的に空軍に喧嘩を売ってきたテロリストがこんな巫山戯た的みたいな部隊だけ配備して終わりにするとは思えない。まして、最初のスクランブル部隊を撃墜した”単機”の戦闘機が何もせずに戻るとは思えなかった。

「相変わらず捉えられない。ブレイブフェザーの反応消失直後に全速で後退した後、消息を断つたままだ」

幾ら改良されていると言っても、高々テロ組織が運用できる戦闘機だ。コストパフォーマンスはとにかく、絶対的な性能ではこちらに勝るものではあるまい。ステルスなどと言った最新兵器が用意されているわけではない筈だ。

「亜細亜のあけぼの」か……」

犯行声明を出した日本で唯一の”第一種特定テロ組織”の名前を呟く。日本が平和国家の看板を切り捨て、今のような空軍国になる最初の切っ掛けを作った組織だった。

「……古い時代の遺物が、何を偉そうに」

編隊長の呟きが漏れる。実際、10年も前に一度壊滅し、前の戦争でも沈黙を守った組織が、何故今更になって活動を始めたのか。既に目標である国からは、あの頃のような甘さは消えているというのに。

「とにかく、警戒を怠るな。何時出てくるか判らん」

例の1機を探して海上を搜索するのか、それとも増援を待って撤退するのか。何にしても問題は此処からだ。

「……この後はCAPか？」

AWACSに確認を取る。あくまで指揮官は俺やエクセル11ではない。AWACSの管制官であり、それを指揮する統合司令部だ。『そうだ。救難隊と後続編隊の到着まで上空待機。その後広域探索に移行する』

そして彼らはこの不屈き者を徹底的に排除するつもりだった。俺達もその意志は変わらない。

『そついや、今日はアレの進水式だったな』

レーダーをルックダウン（低空探知）に変更。海面まで含めた広域探知を行う。全周は無理でもかなりの範囲を抑えられる筈だ。

「アレ、ですか。確か呉で今頃始められている筈ですね」

彼らがテロを行う目標も解つてはいて、十分な対策も取られている。その為に呉では艦艇がずらりと並んで観艦式もかくやという状態になっているのだから。

『鳳翔、だつたか？』

その艦名は世界最初の船と同じだった。直接的な打撃力を持たず、プラットフォームであることに特化した浮かぶ飛行場。

「日本が再び手にしようとしている正規空母ですね。彼らが狙うには相応しい目標だ」

『だが、航空機で突破するには防御が硬すぎる。国家の支援を受けていても非正規組織の兵力では無理だ』

AWACS管制官が即座に否定する。確かに全国に張り巡らされたレーダーサイトは十分に仕事をしてくれるはずだ。それでも、突破する方法が無いわけではない。

「超低空侵攻とFAEB（燃料気化爆弾）、誘導貫通爆弾の組み合わせ、それでどうにか出来る筈です」

前の戦争で敵軍の特務部隊がよく行った方法だった。精鋭と呼べるパイロットと超低空域で十分な機動性を持った戦闘機を組み合わせ、十分な圏を用意できれば難しいことではない。

『低空か……、瀬戸内海を船を縫って突破できる部隊があると考え

「たんだな？」

編隊長は管制官とは対照的にそれをありえると判断したらしい。前の戦争で実戦に出ていただけのことはある。あまり語ろうとはしないが、実際に迎撃した事があるのかも知れない。

「ええ、大漢中が軍縮した兵士が何処に流れるか考えれば、亜細亜のあけぼのでも全く不思議はありません」

最重要同盟国の事実上の最精鋭部隊だ。決して不可思議な選択肢ではない。

「だろうな、……ビンゴだ、エクセル12」

レーダーが電子音を発し、MFD(多目的ディスプレイ)に8つの輝点が表示される。

「全く、嫌な予想ばかり当たる。……(エクセル12、目標捕捉)距離は僅か5ノーチカルマイル(nm、約9km)。高度差があるとは言えこれは……」

「目標だと？ 詳細は?!」

「(高度は低すぎて不明、方位120、数8、5マイル)」
完全に抜けられた。この状態からだ回り込んで追撃を掛ける形になる。

「まんまとしてやられたな。エクセル13、14の到着は？」

30分待機で準備していた後続編隊は離陸したばかりの筈だ。とても間に合わない。

「最速で5分、間に合わん！」

それなら俺達が向かうしかないが、それを彼らが許してくれるかどうか……。

「(ミッドナイトアイよりエクセルへ。高速で接近する機影が4、60マイル)」

二回目の囷。教本通りであれば、一線級の実力を持った有力な戦闘機編隊が来ているはずだ。

「やはり来たか……」

レーダーの探知モードを変更。同時に敵機を捕捉する。

『（エクセル12、40マイルで中距離ミサイルを仕掛ける）』

少数で出来ることは限られている。倍の数を誇る同等の能力を持った相手だ。目の前の敵編隊を削るまでしか出来ないだろう。

「（了解）……後ろは任せて下さい、隊長」

一度ロックしたマスターアーム（火器管制装置）を再起動。搭載した中距離ミサイルであるAAM-4B（九九式空対空誘導弾改）が無事に動くことを確かめる。一応負けない戦いまでなら出来るはずだ。

『いや。お前は斉射後に攻撃隊の後背に喰いつけ』

だが、編隊長の命令は全く別のものだった。

「……本気ですか？」

空戦の基本原則すら無視した、単独戦闘による同時迎撃。

『奴らの作戦が成功したら負けだ。苦しかろうが分けるしかない』

『無謀すぎる！ 岩国のスクランブルが上がった。無謀な真似はするな！』

管制官は即座に制止する。実際、その条件での成功率はゼロからカウントしたほうが早いくらいだろう。

『だが、不可能じゃない』

『攻撃隊は他部隊に任せエクセルは目の前の敵編隊を迎撃しろ！

これは命令だ！』

完全な意見の食い違い。本来なら格上のAWACSに従うべきだった。

『防人の意地を見せてやろうじゃないか』

だが、編隊長の言葉の重みを知っている以上、現場で飛び続けた彼の言葉の重みを知っているからには、どちらに従うべきかは明白だった。

「……（了解、エクセル11。敵主力部隊に追撃を掛けます）」
敵編隊との距離が縮む。

目標、50マイル

どのみち問答をしている時間はなかった。

『（エクセル、命令に従え！ 死ぬことになるぞ！）』

『俺のTACネームは有名だろう？ 墜ちはしないさ』

落ち着いた状態で答えてみせる編隊長。その言葉が虚勢であつても自信に溢れているのはそれを裏打ちするだけの経験があるからだ。『大地が焼かれるのを見るのは二度とゴメンだ』

その彼が守ろうとして守れなかったものが何だったのかは知らない。それでもその重さはある程度想像できる。

「全くです。俺達で守り抜きましょう」

『糞……、どうなつても知らんぞ！』

A W A C S 管制官も折れた。岩国の内実を知っていればこうなるのは当然ではあつたが。

『逆らう以上は絶対に生きて帰れ！』

『（エクセル11、レーダーロック）』

編隊長が目標を捉える。A A M - 4 B の誘導を譲り渡した俺は、発射タイミングを待つだけだった。

目標、40マイル

彼らが境界線を超える瞬間は思ったより早かった。

『（エクセル11、フォックス3）』

「（エクセル12、フォックス3）」

発射コールは多少ズレたが、ほぼ同時に4発ずつのA A M - 4 B が放たれる。日本が誇る最高クラスの長槍は、殆ど白煙も引かずに

視界から消えていった。

「（幸運を、フェニックス）」

90度ロールして機首を引き起こす。水平旋回。ミサイルの誘導は正しく引き継がれていた。

「ああ。そちらもな、ヒートヘイズ」

編隊長が俺のTACネームを呼ぶ。今まで長い間飛んでいたが愛称で呼ばれたのは初めてだった。

「後でちゃんと来てくださいよ。長機が居ないと様にならない」

「終了後にお前が無事なら、だ」

アフターバーナーに点火。戦域離脱の為にF-15Jは限界ぎりぎりの加速を始める。

「奇跡を起こしてこい」

端的な応援は互いの困難と任務の重さを簡潔に示している。そして、編隊長は通信を切る直前に一言だけ付け加えた。

出来るのはお前だけなんだから、な

Episode 1・1 Eagle of Warfare (1) (後書き)

展開の変更と一分設定の変更が必要となったために全面的な書き直しを行いました。読者の皆様方に御迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

尚、本文中に出てきた用語で不明な点があればご連絡下さい。暫く後に用語集を作成する際に反映します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659w/>

Celestial Memories 想いの交差する空で

2012年1月10日01時46分発行